

自ら学び、自ら考える子どもの育成 ～豊かな表現力を育てるための指導の工夫を通して～

足利市立毛野小学校

I 研究の概要

1 研究主題設定の理由

(1) 今日の課題から

今日の社会は、国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、高齢化・少子化等、様々な面で大きく変化しており、これらの変化を踏まえた新しい時代の教育の在り方が問われるようになってきた。このような21世紀の社会の中で生きていくこれからの子どもたちが、備えていなければならない資質や能力について多くのところで議論されてきている。

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申においては、これからの学校教育の在り方として、「ゆとり」の中で「生きる力」の育成を基本として4つの提言がなされた。その提言の一つは「自ら学び、自ら考える力を育成すること」である。これからの時代にあっては、生涯にわたって自らの能力を高め、自己実現を目指そうとする意欲や態度が一人一人に求められる。

そこで、学校教育で重視しなければならないことは、「確かな学力」の育成、すなわち、基礎・基本の指導を徹底し、知識・技能とともに自ら学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力などを養うことである。現行の学習指導要領は、この答申の「生きる力」の育成を基本に改訂されている。

また、足利市において昭和56年に設定された『足利市の教育目標』では、7つの柱の一つ「主体的な態度の育成」の中に、生涯学習の基礎を培う観点から「基礎的な知識や技能を習得し、自ら学びとる態度を身につける」（教育目標番号52）を位置付けている。この態度を育成することや基本的な生活習慣の確実な定着を図るためには、学校教育と家庭教育の連携が不可欠であることにもふれている。

(2) 学校教育目標から

本校では、21世紀を担う望ましい人間像として社会の変化に自ら対応できる、心豊かで創造性に富み、実践力のある日本人の育成を目指し、

教育目標	1 進んで学ぶ子ども
	2 思いやりのある子ども
	3 ねばり強い子ども

を設定し、教育実践を進めてきている。

教育目標「1 進んで学ぶ子ども」では、ただ知識や情報を獲得するだけでなく、課題を見つけ、よりよく解決するためにそれらを適切に活用し、自分の頭で考え、創造し、表現する資質や能力を高めていこうと考える。

「2 思いやりのある子ども」では、価値あるものに心を動かす感性、他への思いやり、社会のルール、人間関係を調整し発展させる能力等を集団生活を基盤とする体験活動の中で養い、育てていこうと考える。より良い人間関係をつくることにより、一人一人の学びを深めるための学び合いの場を設け円滑に行えるようにさせたい。

「3 ねばり強い子ども」では、心身の健康の保持増進を図るため、進んで運動に親しみ、ねばり強くやり遂げるたくましさ育てたい。学習においては、課題を自力で解決しようとする意欲が継続する児童を目指し育てていきたいと考えている。

(3) 児童の実態から

教師の日常の観察や記録及び「学力向上のためのアンケート調査」（平成17年9月実施）から本校児童の実態を考察すると、次のような実態が考えられる。

① 良い面

ア 明るく元気で素直である。

イ 与えられた課題にはまじめにねばり強く取り組む。

ウ 書くことを通して自分の思いや考えを表現し、伝えることは良くできる児童が多い。

② 努力を要する面

ア 進んで課題を見つけ、解決しようとする意欲に欠ける児童が見られる。

イ 自分の思いや考えを多数の人の前で発表することへの苦手意識が強く、進んで発表できない児童が見られる。

以上のことを踏まえて研究主題・副主題を設定した。

3 研究主題・副主題の基本的な考え方

「自ら学び、自ら考える」とは、与えられた課題だけではなく、自ら進んで課題を見つけ、主体的に判断し、よりよく問題を解決していくことである。つまり、生涯学習社会や急激に変化する社会の中で、生きて働く中核になる能力や態度である。

その能力や態度を育てる上で、小学校は、生涯学習の基礎を培う大切な時期であると考えられる。将来にわたって自分から進んで様々なことを学び、考え、判断していく能力や態度を育成していくことである。そのためには、各教科や総合的な学習の時間などの学習指導を展開していく中で、児童の思考力や判断力、表現力、問題解決能力などを育てていくことが必要であると考えた。

これらの能力を育てていくにあたり、児童の実態から「表現力」に焦点をあて研究を進めていくことにした。次の4本校の目指す「豊かな表現力」を育てることにより、児童は、自らの考えや思いを言語を通して的確に相手に伝えることができるようになる。そして、お互いの立場や考えを尊重しながら、目的や相手、あるいは場面に応じて分かりやすく表現する態度が身につくと考えた。

4 本校の目指す「豊かな表現力」

本校の目指す表現力は、言語能力の中の「豊かな表現力」に焦点をあて、国語科を中心に研究実践することとした。特に、「これからの時代に求められる国語力」(文化審議会答申 平成16年2月3日)を参考に、本校としての「豊かな表現力」を低・中・高学年の発達段階を踏まえ検討し、次のように整理した。

【一部抜粋】

ア 自分の考えを明確にして、説得力をもって、論理的に伝えることができる。

○ 意見を整理、根拠・理由を明確に

○ 相手の話を受け、その内容をふまえて、自分の考えや意見を適切に話すことができる。

(低) 伝えたいことを順序に気をつけて表現することができる。

(中) 中心を考えて、根拠や理由を入れて、分かりやすく表現することができる。

(高) 自分の考えを明確に伝えるために、組み立てを工夫し、効果的に表現することができる。

5 研究の方針

- ・ 個に応じた指導法の工夫・改善を図る。
- ・ 共に学び合うための指導法を研究する。
- ・ 基礎的・基本的な学習内容を確実に身に付けさせる指導法を研究する。
- ・ 国語科を中心として、表現力を育てる指導法を研究する。

- ・ 授業実践等を通して教師の指導力の向上を図る。
- ・ 家庭との連携を図る。

6 研究の目指す子ども像

- ・ 基礎的・基本的な学習が身に付いた子
- ・ 進んで課題を見つけ、解決しようとする子
- ・ 自分の言葉で表現できる子
- ・ 友達の意見を聞きながら、活発に話し合いができ、自分の考えを高めることができる子

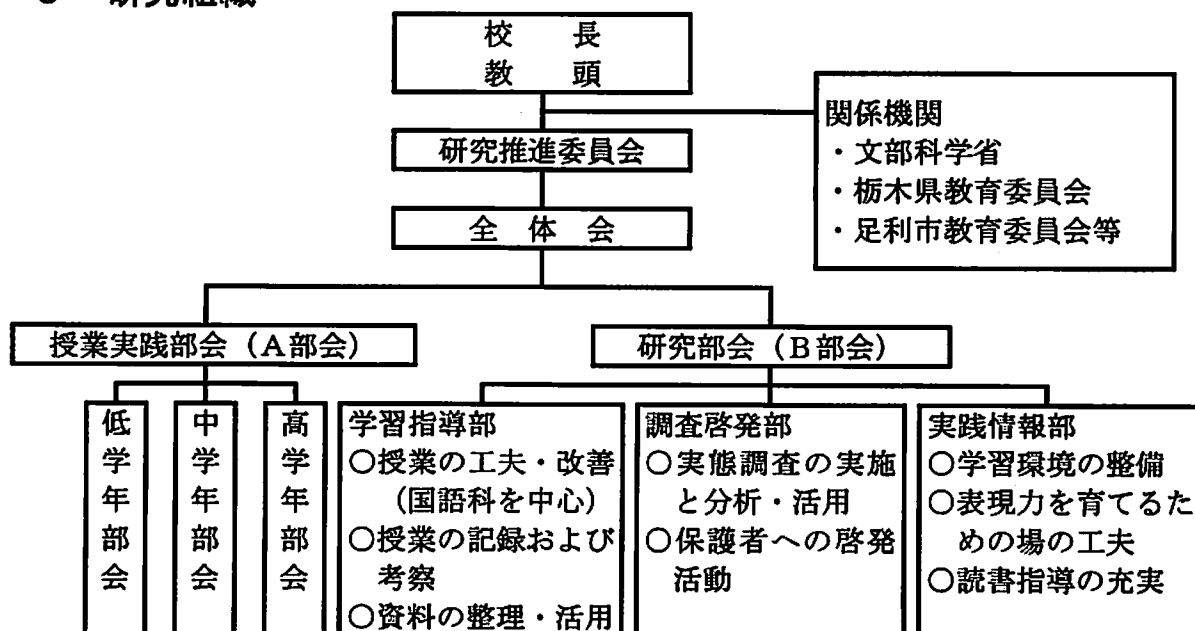
7 研究の仮説

児童一人一人が自分の思いをもち、豊かに表現し、学び合うための指導の在り方について実践を通して研究していけば、自ら学び、自ら考える児童を育てることができるであろう。

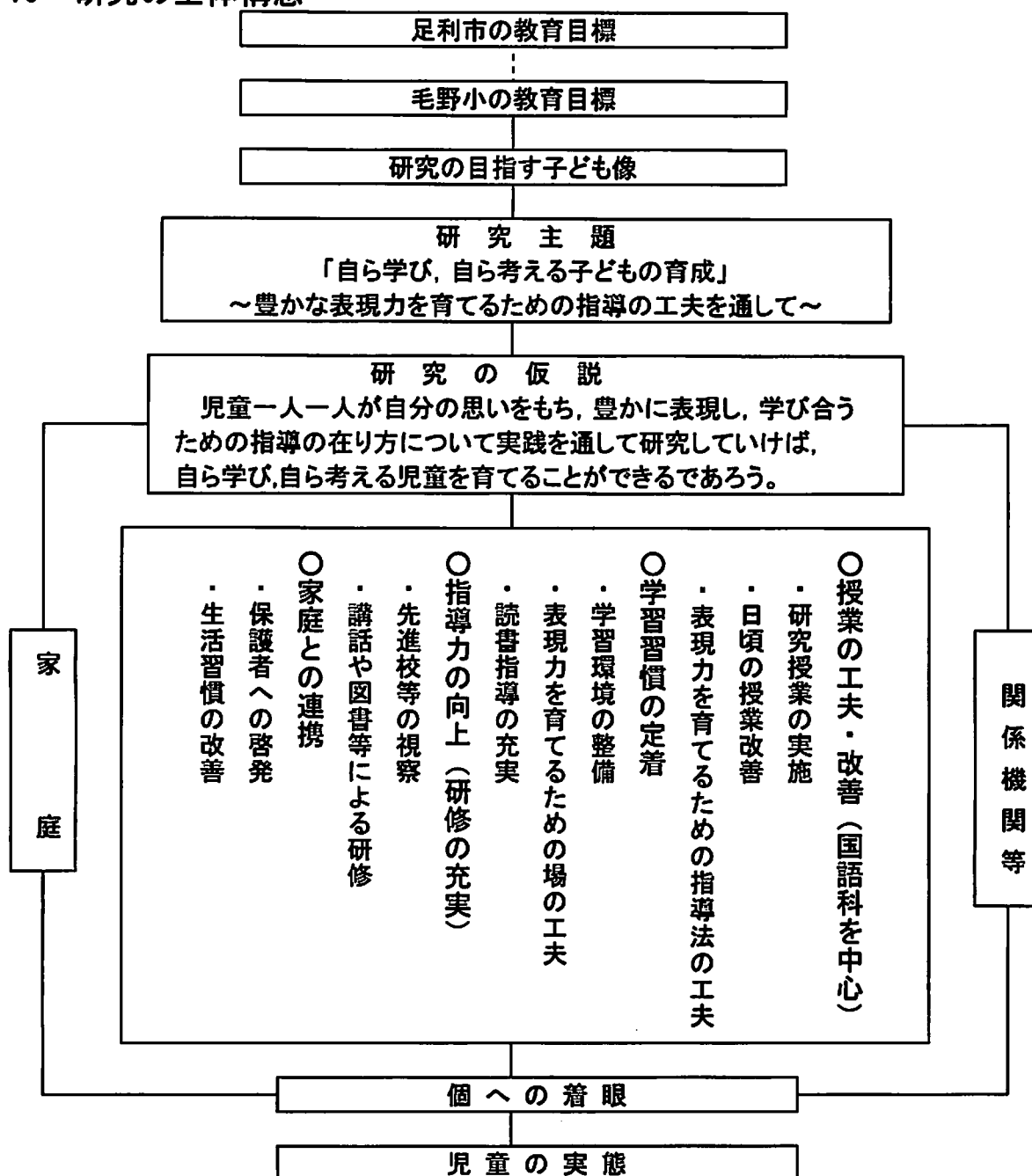
8 研究の内容

- ・ 授業の工夫・改善（国語科を中心）
 - ① 研究授業の実施
 - ② 日頃の授業改善
 - ③ 表現力を育てるための指導法の工夫
- ・ 学習習慣の定着
 - ① 学習環境の整備
 - ② 表現力を育てるための場の工夫
 - ③ 読書指導の充実
- ・ 指導力の向上（研修の充実）
 - ① 先進校等の視察
 - ② 講話や図書等による研修
- ・ 家庭との連携
 - ① 保護者への啓発
 - ② 生活習慣の改善

9 研究組織



10 研究の全体構想



II 研究の実際

〔学習指導部〕

1 役割

学習指導部の役割は、児童の学力向上を図るために研究授業を通して日々の授業を振り返り、その工夫・改善を図っていくことである。特に、学習指導のあり方や指導法について国語科を中心に実践研究などを推進してきた。

また、実践してきたよりよい指導法や資料等を日々の授業に生かし、保管・整理していくための中心的な役割を担っている。

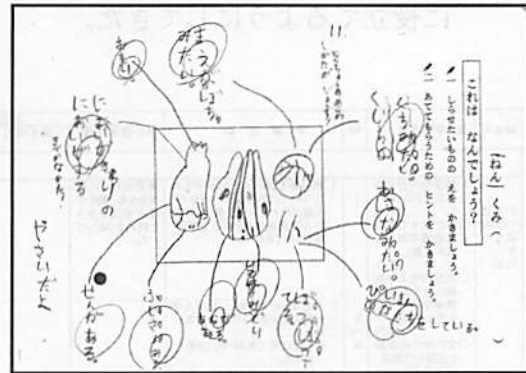
て認め励ましたり、助言を与えたりするコメントを書くように努めた。このような教師とのやりとりを通じて、児童は次時への意欲を高めることができた。

③ ワークシートの工夫

児童の実態に応じたワークシートを作成することで、学習の仕方を理解させるとともに、効果的・効率的に進めることができた。

ア 1年生 よく見てかこう 「しらせたいな 見せたいな」

知らせたいものの特徴が詳しく書けるように、次のようなワークシートを作成した。子どもたちは、絵を描きながらいろいろな特徴に気づくので、中央に絵のスペースを位置づけた。また、その周りには罫線や枠などは入れず、子どもたちが思いついたことを、自由な表現でたくさん書くことができるようにした。



イ 5年生 調べたことを整理して書こう

言葉に関する疑問や知りたいことから決めた一人一人の課題を解決するために、自分に合った調べ方をし、レポートをまとめた。その際、調べる方法により、インタビューカード、アンケートカード、調べカードの3種類を用意した。さらに、レポートを書く形式を示し、レポートの構成を意識させ、自分なりに表現させた。特に、レポートの中でも重要なまとめの部分については、学習の振り返りをさせ、確認をさせながら書かせるために構成表を用意した。

「言葉の研究レポート」

<p>「スズメバネはさうして林知ともさうのかわり。」 「コウモリはさうして林知ともさうのかわり。」 二 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 三 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 四 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。</p>	<p>「スズメバネはさうして林知ともさうのかわり。」 「コウモリはさうして林知ともさうのかわり。」 二 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 三 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 四 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。</p>	<p>「スズメバネはさうして林知ともさうのかわり。」 「コウモリはさうして林知ともさうのかわり。」 二 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 三 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 四 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。</p>	<p>「スズメバネはさうして林知ともさうのかわり。」 「コウモリはさうして林知ともさうのかわり。」 二 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 三 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。 四 ほかにも、さうして林知ともさうのかわり。</p>
--	--	--	--

調べカード

自分の調査方法に合ったカードを使用することにより、調査を意欲的に進め、レポート作成に効果的に活用することができた。児童はレポートの構成に従って内容を整え、見出しをつけて文章にまとめることができた。さらに、事実・思ったこと・課題に分けて考えたことで、調べた内容とそれに対する自分の考えを対応させて書くことができた。

④ 学び合いの場の工夫

児童が、表現をより深めたり、磨いたりするためには、他の児童との交流が不可欠である。そこで、授業の中にいろいろな形の学び合いの場を取り入れるように心がけた。

ア 2年生 書いて知らせよう 「かんさつ名人になろう」

友達の表現のよさに気付かせ、自分の表現をより豊かにさせるという意図で、

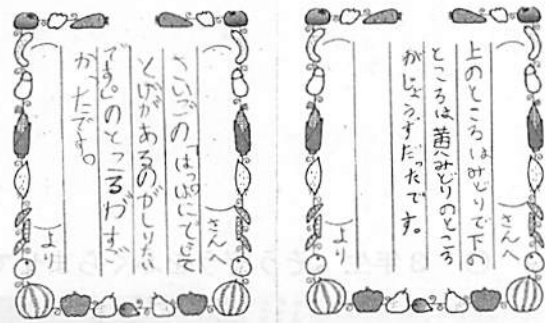


同じ野菜を育てている者同士で観察

自分の書き方との比較がしやすく、友達の書き方のよさが分かりやすかったようだ。さらに、相手にほめてもらったことで、書いたことへの喜びを味わうことができたようだ。これは、書くことへの意欲につながっていった。

同じ野菜を育てている子ども同士でグループを作り、活動させた。同じ野菜を観察することでメモを書きながら情報交換ができ、自分では気付かなかったところに気付くことができたようである。

また、書き上がった作文をそのグループの中で読み合い、感想を交流させた。同じ野菜について書いてある子ども同士なので、



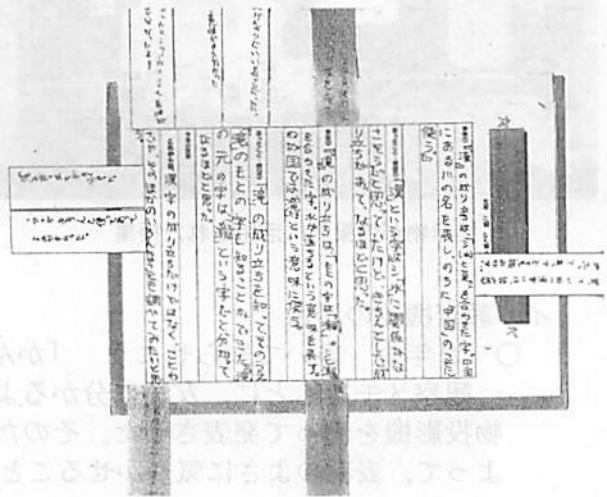
感想カード

イ 5年生 調べたことを整理して書こう 「言葉の研究レポート」

レポートのまとめを書くに当たり、まずまとめの構成表を書かせた。そして、各自が書いた構成表を少人数のグループで読み合い、良いところや直した方がよいところをチェックし、よりよいまとめができるようにした。

その際、チェックカードの項目を手がかりに友達の作品を評価させ、良いところは黄色の付箋、直した方がよいところは水色の付箋に具体的に書き込ませ、アドバイスを分かりやすくした。

この活動により、まとめの構成表の内容を深めることができた。また、お互いのよさを認め合うことができ、子どもたちの意欲につながった。しかし、児童によっては、直した方がよいという水色の付箋をたくさんもらってがっかりしていた様子も見られたので、事前に付箋を活用する意義を指導する必要がある。



⑤ 学習環境の工夫

ア 掲示物

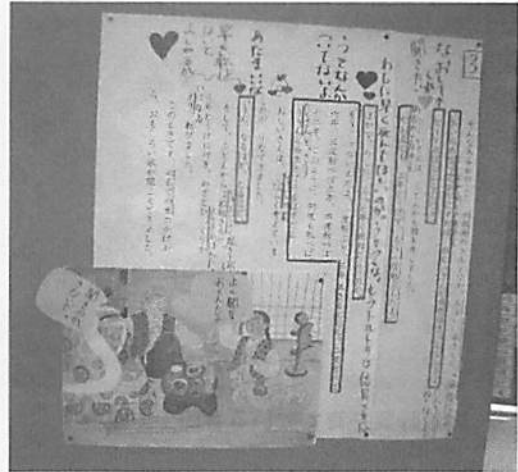
単元を通して常時掲示される「学習計画表」をはじめとする様々な掲示物は、児童の学習への興味・関心、表現意欲の喚起に大きな役割を果たす。

○ 3年生 本と友だちになろう 「三年とうげ」

前時までのふり返りをするとともに、表現の苦手な児童、表現の仕方が分からない児童に、より豊かな音読表現をさせるための手立てとして、行間に登場人物の気持ちを子どもの言葉で書き込みをした本文を掲示した。児童は、それをもと

に声の大きさ、抑揚など音読の工夫に役立て、自分なりの音読表現をすることができた。

その結果、同じ場面、同じ文章でも表現の仕方に個性が見られ、より豊かな音読表現ができた。



本文に書き込みをした掲示物

- 3年生 そうぞうをふくらませて書こう 「たからものをさがしに」



掲示物が効果的に活用された授業

色彩豊かな大きい挿絵を掲示することにより、文章だけではイメージがもてない児童の想像力を引き出すことができた。また、「エルマーのぼうけん」の文章構成図や「物語を作る上でのルール」を掲示することで、物語を書く手順やルールを確認しながら、物語構想を具体的に書かせることができた。

そのため、文章表現や構成の苦手な児童も意欲をもって最後まで熱心に取り組むことができ、それぞれがその子らしい物語を完成させることができた。

イ 教育機器の活用

- 2年生 書いて知らせよう 「かんさつ名人になろう」

観察メモをもとに、友達に分かるように文章を書き、発表させる場面では、実物投影機を使って発表させた。そのため、友達が書いた文章を全員で見ることによって、表現のよさに気づかせることができた。

- 4年生 調べて発表しよう

調べた内容や方法、知らせる中心や感想を入れて、スピーチメモを作らせた。初めはグループでメモを交換して読み合い、次に実物投影機を使って何人かに発表させた。その結果、友達のスピーチメモのよさなどに気づくことができた。

最後にはメモをもとに自分の発表をテープレコーダーに録音して確認させた。テープレコーダーで自分の発表を聞くことによって、自分の話し方についてふり返ることができた。

- 4年生 材料の選び方を考えよう 「アップとルーズで伝える」

取材メモをもとに相手や目的を考えて記事を仕上げた。初めに他のグループの下書きを読み合い、次に実物投影機を使って数名の児童に発表させた。その結果、友達の書いた良い記事などを自分の記事と比較でき、より良い表現に結びつけることができた。

○ 5年生 調べたことを整理して書こう 「言葉の研究レポート」

まとめの部分の構成表をもとにレポートを書き上げていった。初めにグループで構成表を読み合い、内容を整理させていった。最後に実物投影機を使って友達のレポートを発表させ、友達の表現のよさや自分とは違う表現の仕方に気付かせていった。

以上のように、実物投影機やテープレコーダーなどの機器を授業の中で適切に取り入れることは、表現しようとする意欲を高めるとともに、表現力を向上させるためにたいへん効果的である。

(2) 授業の記録及び考察

研究をより深めるために、授業についてビデオや写真などによって記録したり、成果と課題についての考察を行ったりした。これにより、効果的な指導法を確認したり、次の授業での改善点を明らかにしたりすることができた。



(表) 授業の成果と課題の一覧表

(裏) 授業で使った資料、授業の写真をまとめたもの

(3) 授業で使った資料やワークシートの整理

授業で使った資料やワークシートは、授業者はもちろん、学年やブロックのメンバーが知恵と労力を集めて作成した貴重な財産である。それらを学習指導部が中心となって学年別の収納場所に整理・保管するようにし、次年度の指導に役立てたり、参考にしたりしている。

〔調査啓発部〕

1 役割

調査啓発部は、本校の研究の方向や内容・方法を考えていくために、児童の学習や生活の実態を調査した。そして、継続的かつ定期的に同じ項目のアンケートを取ったり、必要に応じてアンケートの項目を改善したりしながら、児童の変容を見つめてきた。

また、児童の学力向上を促すためには家庭との連携も不可欠であるため、保護者に対しても全学年の学年だよりで毎月学習状況を伝えたり、専門の講師を招いた講演会を実施したりして、啓発活動に努めてきた。

2 研究の実践

(1) 研究の方向性を定めるためのアンケート

研究を始めるにあたって、研究の方向性を定めるためには、児童の実態を正しく把握し、本校の児童にとって、適切な課題を明確にする必要があった。そこで、教師の観察から本校の児童の

特徴として素直で、与えられた課題にはまじめにねばり強く取り組むことができる一方で、自分の思いや考えを友達の前で書いたり発表したりすることを苦手とする児童が多いのではないかと予想した。その結果を確かめるためにアンケートを実施した。

アンケートの結果より、自分の思いや考えを書いて伝えることについては、ほぼ半数の児童が「好き、どちらかと言えば好き」と答えており、教師が予想するよりも児童は書くことに対して苦手意識をもっていないことが分かった。

しかし、自分の思いや考えを話して伝えることについては「好き、どちらかと言えば好き」と答えたのは全体の約36%であった。教師の観察から予想したとおり、本校の児童の実態として、特に、話すことにおいて自分の思いや考えを伝えることに苦手意識をもっている児童が多いと言えることがわかった。

(2) 児童の変容を見るためのアンケート

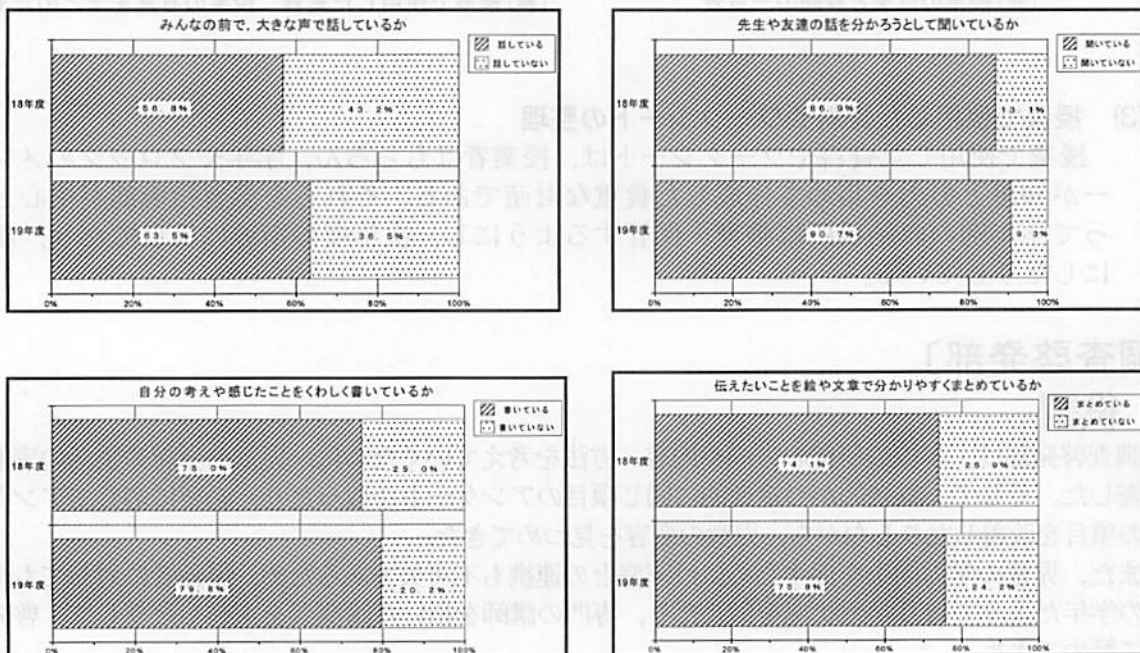
平成17年9月12日実施のアンケート結果を踏まえ、本校では授業の工夫・改善、学習習慣の定着、指導力の向上、家庭との連携を通して「自ら学び、自ら考える子どもを育てるための指導」をしてきた。そこで、同じ項目のアンケートを一年後の平成18年9月に実施した。

アンケートの結果より、自分の思いや考えを話すことが好きかの項目については「好き、どちらかといえば好き」と答えた割合が7ポイント増えた。これは、本校の児童の課題としてきた「大勢の人の前で発表すること」の苦手意識を少なくするために、手立てとして授業等で話すことに対して指導したり、朝の会にスピーチを取り入れたりしてきた成果であると思われる。

(3) 表現力に関するアンケート

上記の平成17年9月、18年9月の結果を受け、研究副主題にせまるために特に表現力に関するアンケートとして次の4項目に絞って実施した。アンケートの項目を絞ることにより、児童の実態がはっきりし、指導の重点化が図られるのではないかと予想した。

【アンケートの結果】



すべての項目において、児童の意識が上向きになっていると言える。特に、表現力を育てるための場の工夫として、朝のスピーチを全クラスで実施し、相手意識をもたせ話す態度を身に付けさせるようにしてきたことが効果的であったと考えられる。また、大勢の人の前で話す経験を重ねることも抵抗を少なくする手段の一つであることが分かった。

一方で、「分かりやすくまとめる」ことについては変化がほとんど見られなかった。工夫し

てまとめる児童もいるが、教科書の文や板書をそのまま写しているだけの児童もあり、今後指導をしていく必要がある。

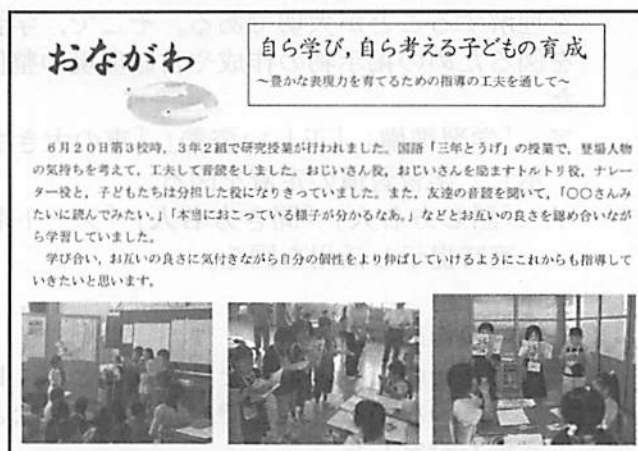
(4) 啓発活動

児童の学習意欲を高めるためには、家庭の協力が不可欠である。そこで、保護者に本校の研究の取り組みを説明したり、子どもたちの学習の様子を報告したりすることで、家族の方々により一層協力してもらえるように啓発活動を行っている。

① 保護者の啓発

ア 啓発コーナー「おながわ」

毎月発行している全学年の学年だよりに、啓発コーナー「おながわ」を設け、日々実践していることや、子どもたちの学習の状況、研究授業の様子などを載せて保護者に理解してもらい、支援してもらえるように知らせる。



イ PTA教育講演会

生活に関する実態調査から本校の児童の睡眠時間が少ないことに着目し、平成18年10月、足利工業大学工学部教授 小林敏孝先生を講師に招き、5・6年児童、保護者、職員対象の「小学生のための正しい睡眠の摂りかた」の講話をしていただいた。睡眠の基礎知識、睡眠の生態学、睡眠の機能、思春期における睡眠の大切さなどを中心にお話いただいた。その後、保護者から寄せられた感想も含め、講演会に参加できなかった保護者に対し「おながわ臨時号」を発行し、家庭で心がけてもらいたいことを知らせた。

平成19年度にも栃木県教育研究所相談部長 丸山隆先生を講師にお招きし、「やる気を育てる家庭教育」と題してPTA教育講演会を実施した。

② 生活習慣の改善

平成17年9月に保護者を対象とし、児童の家庭での生活に関するアンケートを実施した。

また、現在の不規則な生活を見直し、規則正しい生活リズムに整えていく意識付けを図るために生活習慣チェックカードを活用した。



【実践情報部】

1 役割

本校では、児童の学力の定着、特に表現力の育成を図るために、国語科を中心に授業の工夫・改善に努めている。さらに豊かな表現力を育成するためには、国語科以外の授業や授業以外の学校生活の中で様々な実践を進めていくことが必要である。また、これらの実践を授業の中で関連させて生かしていくことが大切である。

そこで、実践情報部では、学校生活の中の様々な実践のための資料を作成し、効果的な

活用ができるようにする。また、学習環境の整備や表現力を育てるための場の工夫、読書指導の充実を図っていくことで研究主題・副主題に迫っていく役割を担っている。

2 研究の実践

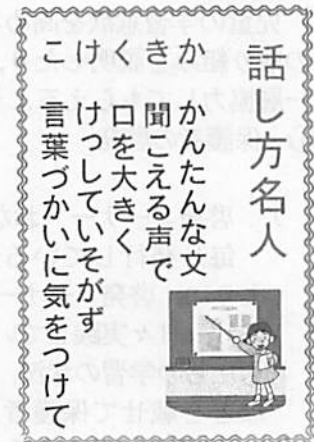
(1) 学習環境の整備

① 学習習慣と言語環境

児童が学習に意欲的に取り組むためには、学習の仕方を理解することが大切である。そこで、学習習慣の定着を図るための掲示物の作成や言語環境の整備を行ってきた。

ア 「学習準備」「正しい姿勢」「声の大きさ」などを掲示し、学習習慣の定着を図る。

イ 「話し方名人」「聞き方名人」「ノート名人」などを適時提示し活用を図る。



② 児童の作品の掲示

お互いの表現のよさを見合うことは、自分の思いや考えを高めたり深めたりすることにつながる。そこで、児童の作品などを掲示し、お互いのよさなどに気づくよう場を設定した。

(2) 表現力を育てるための場の工夫

① スピーチ

本校では、「恥ずかしい」「自信がない」という理由から、みんなの前で発表することに苦手意識をもっている児童が多い。そこで、話すことに慣れさせたり、自信をもたせたりするために、自分のしたことや思いをクラスの中で話す機会を設けてきた。また、スピーチを行う際に相手意識をもたせ、聞く態度を身に付けさせるようにしてきた。



1分間スピーチ

ア 全クラスで、毎日、朝の会や帰りの会でスピーチを行う。

イ スピーチのテーマやめあてを掲示する。

ウ 児童の実態に応じて原稿やメモを活用させる。

エ スピーチ後、質問や感想を言わせる。

② 暗唱

暗唱をすることによって、自信をもって声を出せるようにするとともに、すばらしい表現にふれたり、日本語のリズムを体得したりさせることで言語感覚を豊かにするようになってきた。



全校暗唱の様子

ア 月ごとに詩などを1つ選び、全クラスで暗唱に取り組む。

イ 月に一度、朝会時に全校暗唱をする。

ウ 児童一人一人に暗唱カードを持たせ、練習させる。

エ 児童の目にふれる場所に拡大した詩を掲示する。

オ 詩をイメージした手作りの掲示物を活用する。

③ 読書指導の充実

児童が読書を通して、たくさんの言葉や文章にふれることにより、語彙を増やし、想像力を豊かにすることができる。そこで、朝の読書チャレンジや読み聞かせを行ってきた。さらに、読書意欲を高める手立てとして、読書の後感想を書かせ掲示してきた。



ボランティアの方による読み聞かせ

ア 朝の読書チャレンジを週2回行う。

イ ボランティアによる読み聞かせを行う。

ウ 図書室の利用や学級文庫の活用を呼びかける。

エ 読書の感想を教室やオープンスペースに掲示する。

オ 年に2回、ふれあい読書週間を設け、親子で本に親しむ機会を作る。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 児童の様子から《研究の目指す子ども像から》

① 学習計画表を活用することにより、児童が見通しをもって学習に取り組むことができるようになってきた。〈基礎的・基本的な学習が身に付いた子〉

② 児童の実態に応じたワークシートを活用することにより、児童は学習の仕方を理解し、効果的に学習を進めることができるようになってきた。

〈基礎的・基本的な学習が身に付いた子〉

③ 学び合いの場を通して、児童は友達の良い表現に気付き、それを自分の表現に生かしたり、良さを認めてもらうことで表現への意欲を高めたりすることができるようになってきた。

〈自分の言葉で表現できる子〉

〈友達の意見を聞きながら、活発に話し合いができ、自分の考えを高めることができる子〉

④ 国語科以外の教科・領域でも、学習して感じたことや考えたことなどを自分らしく表現する児童が増えてきた。〈自分の言葉で表現できる子〉

⑤ 生活習慣チェックカードの活用やPTA講演会の開催により、学力向上に大切な望ましい生活習慣を身に付けようということを、意識する児童が増えてきた。

(2) 教師の取り組みとして 《研究の方針から》

① 豊かな表現力を育てるための指導の工夫について、全職員が共通理解のもとに、実践する大切さを実感した。〈授業実践等を通して教師の指導力向上を図る。〉

② 掲示物を工夫したり、教育機器を活用したりして学習環境を整えることにより、児童の表現することへの意欲を高めることができるようになってきた。

〈基礎的・基本的な学習を確実に身につけさせる指導法を研究する。〉

〈国語科を中心として、表現力を育てる指導法を研究する。〉

③ 児童対象のアンケートを実施・考察し、指導法改善のための資料として役立てることができた。〈基礎的・基本的な学習を確実に身につけさせる指導法を研究する。〉

④ 自己評価カードやワークシートに目を通すことにより、授業中把握できなかった一人一人の様子や思いを知り、次時の学習の手立てを講じることができるようになってきた。

〈個に応じた指導法の工夫・改善〉

⑤ 授業の実践・考察・改善を繰り返すことにより、効果的な指導法や課題などが少しずつ明確になってきた。〈授業実践等を通して教師の指導力向上を図る。〉

⑥ 指導資料を整理・保管することにより、活用しやすくなった。

〈授業実践等を通して教師の指導力向上を図る。〉

⑦ 保護者への啓発活動や定期的実施した「生活習慣チェックカード」の活用を通して保護者の理解と協力を得ることができた。〈家庭との連携を図る。〉

2 今後の課題

- (1) 児童一人一人が「自ら学び、自ら考える」ことができるよう、さらに個に応じたきめ細かい指導を継続することが大切である。
- (2) 児童が、考えをまとめたり、次の学習へそれを生かしたりするためのノート作りは、「自ら学び、自ら考える」能力や態度を育てる上で大切なことと思われる。そこで、ワークシートの活用とともに、ノートの活用についても研究していきたい。
- (3) グループやクラス全体での学習の場で、自分の思いや考えが相手に十分伝わるよう、目的や相手、場面を意識して話せるようさらに指導していきたい。
- (4) 自己評価カードについては、児童が授業中書くための時間と教師がチェックし、朱書きする時間が必要になるため、効果的・効率的な活用を工夫する必要がある。
- (5) 児童の学習や生活の実態を調べ、指導に生かすために今後もアンケートを継続的に実施していく必要がある。その際、アンケートだけでなく、児童の学習や生活を多面的に捉えていく工夫をしていきたい。
- (6) 表現力を育てるための工夫として、授業以外の場でもスピーチや暗唱などをしてきたが、これからも継続・改善していくとともに、より良い実践ができるよう努力したい。
- (7) 友達の意見を聞きながら、活発に話し合いができ、自分の考えを高めることができるように国語科を中心に実践研究してきたが、これからは、総合的な学習の時間を含め教科・領域などで、自分の考えを高めることができる児童を育成することが大切である。

【 研 究 同 人 】

【平成19年度】

岩田 昭	中村 真一	嶋村 君枝	辻 泰三	加藤美代子
小川 幸江	尾崎 行子	田米開裕人	石島 尋子	神山 正夫
飯塚 俊昭	大森 益恵	中嶋 明美	横塚千恵子	山田 勝彦
服部 英樹	内田 志保	塚田美智代	石川 泰代	岩上 智子
工藤 志乃	早見知恵子	大貫 響子	青木 健史	川島 和代
橋本 和子	柘野真祐美	高田 淑子	上武 庸子	勅使河原友紀子
須永 紀子	濫澤 幹恵	新井 満	関口 晴美	中村 芳江
川田美智代	長竹恵美子	小林しのぶ		

【18年度】

松崎 令子	増田美恵子	宮崎 朗彦	飯塚 澄子	
-------	-------	-------	-------	--

【17年度】

亀井 義勇	半田まり子	石川よし江	小池 直子	川田 秀一
小林 菜穂	松浦 敏夫	五百部悦子	興野 千明	川田 博
廣瀬 摩弥				